

ライフステージに応じた研修の在り方に関する研究

—— 各研修および各ステージ間の有機的なつながりを目指して ——

カリキュラムセンター指導主事研究会議

須山佳代子 南谷 隆行 宮嶋 俊哲 鈴木 克彦 中西 憲子 仲野 雅子
縄田 芳信 倉賀野 滋 野田まなみ 森島 烈 伊藤 敏明 水之江 忠
小堤 紀子 安藤 勉 藤中 大洋 田中 理恵

I 主題設定の理由

子どもたちにこれからの社会で求められる力を育むために、教員には「教員としての専門性の基盤となる実践力」「新たな学びを支える実践的指導力とそれを常に刷新し続けようとする探究力」「同僚と協働しチームで対応する力」等が求められている。¹これらは、教員自身が、「学び続ける」ことによって身に付けていくものである。

昨年度のカリキュラムセンター指導主事研究では、身に付けるべき資質能力の視点から研修を見直し、教員のライフステージに応じて3つのステージ²から研修を構成し、内容と方法を示した。本年度は、見直した研修体系をもとに各研修が実施されている。「ライフステージに応じた研修」(以下ライフステージ研修)が目指す「教員自身が、主体的・自発的な学習者として自己のライフステージ研修の目的をその時々更新しながら学び続けること」³を実現するためには、各研修および各ステージ間の有機的なつながりを目指すことにより各研修の充実を図ることが必要であると考え、主題を設定した。

II 研究の内容

ライフステージ研修では、「常に学び続けようとする力」「同僚とチームで協働し、困難な諸課題に対応できる力」「探究的に課題を解決する力」の基盤をステージ1・2で身に付け、15年経験者研修以降のステージ3においては、各学校の中核として活躍することを期待している。そこで、本年度はステージ1・2での研修を中心に、その在り方について研究することとした。

本研究においては、ライフステージ研修を「目標設定(P)」「実行(D)」「評価(C)」「改善(A)」のPDCAサイクルで稼働させ、評価を次への改善と新たな計画の明確な根拠として、研修の基盤とすることを目指していく。ライフステージ研修の全体像を念頭に置き、協働的に研究を進め、その上で各研修を設定する。各研修のねらいや内容を十分に理解して実施に当たるために、期待される研修者の姿等を記載した詳細な資料(「ライフステージに応じた研修ハンドブック」赤刷り)を作成する。終了後は、各回とも研修者の意識の変容や振り返りを分析し、成果や課題を捉える。それらを踏まえて内容や構成を更新し、次回の研修に生かすとともに次年度の研修の計画に反映していく。

このように各研修および各ステージ間を一連のつながりをもった構成とすることによって、研修者の「学校での実践と研修」「自己の振り返りと課題の更新」という有機的なつながりが生み出される。研修者は、研修に対する振り返りを日々の実践での課題設定につなげることの大切さに気付き、自己のライフステージに応じて研修の目的を更新できるようになると考えた。

¹ 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」2012年8月

² ステージ1は、初任者研修～、ステージ2は2校目異動者研修～、ステージ3は、15年経験者研修終了後

³ 川崎市総合教育センター「子どもたちとともに学び続ける教員であるために—ライフステージに応じた研修ハンドブック—」2013年3月

Ⅲ 研究の実際

1 ステージ1

(1) 初任者研修

①研修の計画（全28コマ中「授業力を中心にした研修」のみ抜粋）

受講後に期待される研修者の姿

授業について語り合うことを通して授業を見る視点を持ち、自分の授業を振り返り課題を見付けている。

①学習指導研修（講演、演習）

各班のテーマを設定し、宿泊オリエンテーションまでに、テーマに沿って実践したことをレポートにまとめる。

②宿泊研修オリエンテーション

班別研修で取り組んでいくテーマを確認する。

③学習指導研修（講義）

④スキルアップ研修（ワークショップ）

⑤班別研修

テーマに沿って話し合いを進め、研修報告会で発表する。

⑥班別授業研究（3回）

今までの班別研修、日々の実践をもとに、テーマに沿って自分達の課題を授業を通して話し合う。

課題を更新しながら3回の班別授業研究を進める。2年目に向けての課題を設定する。

宿泊研修

②研修の実際

「学習指導研修」「宿泊研修での班別研修」「班別（中・高の最終回は教科別）授業研究」の一連の研修を、「授業力を中心にした研修」として位置付けている。ステージ1が目指す「毎日の授業改善を重ねていく中で、自らの力量を高める教員」へのスタートとして、2年目、3年目の研修の基盤となる研修である。班ごとにテーマを設定し、共通の視点から授業を見ることができるようになる。授業の課題は何か、どのように改善を図るのかを話し合い、改善策を考える。授業や協議から学んだことを「自分の授業では」と関連付けて考え、明日の授業につなげようとする姿が期待される。

各班のテーマに沿った授業研究

第1回

これまで話し合ってきたことをもとに班の代表者が授業を提案し、授業研究を行った。授業を見て気付いたことを出し合い、課題と改善策について協議した。授業を見て協議することを、自分の授業の振り返りにつなげることを意識した。

第2回

第1回の班別授業研究での協議を生かしてテーマの更新や課題の設定を行い、授業研究を行った。授業を見る視点を意識して授業記録をとり、具体的な場面を捉えて協議することを目指した。

第3回（中学校は教科別班での授業）

初任者研修でのまとめの班別授業であることを意識し、授業研究を行った。「研修で学んだことが自分の授業の改善につながっているか」を視点に授業研究を振り返った。また、2年目に向けて、自分の授業の課題を捉え、研修を生かして実践することを確認した。

2年目教員研修に向けて課題を設定し実践する

2年目教員研修

自己課題の取組レポートの交流へ

③成果と課題

ア 成果

a 共通の視点をもって授業を見ることの効果

『本時の目標に着目する』という授業の視点を明確にしたところ、『自分だったら』と考えながら授業を見て、協議でも積極的に発言でき、『自分自身の学びになっている』とひしひしと感じました。」

「学習指導研修」「宿泊研修での班別研修」「班別授業研究」がテーマでつながったことから、共通した課題意識をもって授業研究を行うことができた。共通のテーマを設定したことで授業を見る視点が明確になり、班別協議の質の向上を図ることができた。また、授業を見る視点をもつことは、自分の授業について考える力を高めることにつながった。

「考える中で発見があることが『意欲を引き出す授業』だと思うので、発見できるような思考をさせる、引き出す発問をすることは、どの教科でも共通することだと感じた。」

本年度から中学校は、複数の教科で班編成をしている。担当する教科以外の授業を見ることで、どの教科の授業にも求められる指導力について語り合うことができた。また、「自分の教科では」と、比較したり関連付けたりして授業を振り返ることにつながった。

b 自分の授業を振り返ろうとする意識の高まり

「授業クラスと自分のクラスの子どもたちを比べ、『自分だったら』どのように実践するかを考えながら授業や協議に臨んだ。」

共通のテーマをもとに授業研究を重ねたことから、協議では授業について活発に語り合う姿が見られた。自分の言葉で語ることは、自分の授業を振り返ることにつながっている。5月と1月に実施した研修後のアンケートを比較すると、授業を振り返っている割合が増加していることから意識の高まりを読み取ることができる。

イ 課題

授業と協議を通して自分の授業を振り返る姿勢をもつことに重点を置く研修の趣旨に鑑み、以下の2点については取組が不足していることが、担当指導主事による振り返りから明らかになった。

a 授業を的確に実践できる力

b 授業を省察する力

④ 次年度の研修に向けて

ア 授業者への支援

班別授業研究では、授業の課題を捉え、その原因や改善策を考える協議が重要な学びの場となる。協議の質は、提案される授業の質によるところが大きい。授業者は、各班のテーマとのかかわりを意識して学習指導案を作成する。また、教科の目標や内容を適切に理解する必要もある。そのために、学習指導案が各教科等の目標と内容に沿ったものになるよう、研修日前に担当指導主事に提出して助言を受ける。担当指導主事は、授業者以外の研修者に、授業者から送付された学習指導案と共に学習指導要領解説や教科書に目を通す等の準備を促す。

イ 授業を省察する力の育成

第3回では、授業を振り返り、2年目に向けて課題を設定した。「ねらいを意識した授業ができていない」等、自分の授業の課題を捉えることはできているが、その原因を探り、解決の方策を具体的に考えることについては課題が残る。授業研究での協議を、日頃の授業実践をもとに進めていくよう努め、授業改善に生かせるようにする。研修後のアンケートでは、5月・1月共「ねらいに即した学習活動」を最も課題であるとして挙げている初任者が多い。初任者が課題と感じていることを視点として取り上げ、協議していくことも有効であると考えられる。

(2) 2年目教員研修

①研修の計画

受講後に期待される研修者の姿

自己を振り返り、課題を見付け、課題解決に向けて具体的な手立てを考え、継続的に実践している。

①講話「道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動(小)」

②班別レポート協議<学習指導、学級経営、児童生徒指導>

i) 教員としての1年目の振り返りをもとに授業づくり、学級経営、児童生徒指導等について2年目の課題を設定し、4月から実践する。授業を通して実現できていること、さらに見えてきた課題等をレポートにまとめて持ち寄る。

ii) それぞれのレポートで挙げられている課題を整理する。

iii) 1回目の講義で研修したことを踏まえて、課題解決に向けて、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動(小)の授業づくりについて、学級経営や児童生徒指導の視点を踏まえ話し合う。

iv) 授業研究、日々の実践に向けて、具体的な手立てを位置付けて課題を更新する。

③班別授業研究(授業公開一別協議)<道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動(小)>

i) 2回目の研修で更新した課題をもとに、課題意識をもって日々の授業実践、授業研究や協議に取り組む。

ii) 班で1名の代表が授業を公開し、他の参加者は2回目までの研修の内容を踏まえて視点を明確にもって参観する。

iii) 2年目研修を振り返り、専門職である教員としての自己の課題を設定する。

②研修の実践

初任者としての1年間を振り返り、自己の課題を見付け、校内での実践を通して授業力向上を図ることを重点とした研修である。課題解決に向けて具体的な手立てを考え、継続的に実践することができる力を身に付けることを目指す。

初任者研修で身に付けたこと

共有した課題について、授業を通して解決を図る

第1回

「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」「外国語活動」について講話を聞き、学習指導要領の目標や内容、指導方法及び年間指導計画の立て方等、授業づくりに生かす新たな視点を学んだ。課題解決に向けて多面的な見方ができる力を養った。

第2回

1年目の取組を「授業づくり」「学級経営」「児童生徒指導」の3つの視点で振り返って書いてきたレポートと第1回の講話から学んだことをもとに協議し、班別授業に向けて、各班で共通課題を設定した。また、授業者は共通課題を踏まえて授業を計画した。授業者以外は共通課題を視野に入れながら個人の課題を再検討し、日々の実践で取り組むことを確認した。

第3回

代表者が「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」「外国語活動」のいずれかの授業を行った。授業者以外は第2回で設定した共通課題の視点で日々の実践を振り返り、レポートを作成し、行われた授業と自分のレポートを重ね合わせながら、課題解決を図るための協議を進めた。3年目に向けて、新たな自己課題を設定し、振り返りと実践を繰り返していくことの重要性を確認した。

3年目教員研修

課題を明確にして授業改善を図る

③成果と課題

ア 成果

a 自己を振り返り、課題設定することの必要性への気付き

「2年目は、1年目で学んだ、教員としての基礎を生かす場だと思った。」

初任者研修での学びを生かし、自分の課題と研修内容とを関連付けて考えることができた。初任者研修と同様の班編成で研修を実施することにより、1年目のテーマを振り返り、2年目の「今」を見つめ直すことで、新たな視点をもって協議を進めることができた。

「自分の授業を振り返り、実践を繰り返しながら課題を見付けることができた。」

授業の振り返りを行うことで、自己課題を追究する姿勢を身に付けることにつながった。班別協議では、共通課題について話し合うことで問題が焦点化でき、解決すべき指導方法等をイメージすることができた。

b 課題解決に向けて具体的な手立てを考えようとする意識の高まり

「今まで実践してきた課題を継続し、より具体的な手立てを考えていきたい。」

自分の授業を振り返ることで課題が見えてくるようになり、授業づくりに向けて、具体的な手立てを考えられるようになった。また、授業を見る目が育ってきているので、自分の授業をもとに授業研究や協議に臨むことができ、自分の課題や今後の取組を明らかにすることができる力が備わってきた。

イ 課題

共通課題、自己課題の課題解決に向けて具体的な手立てを考え、継続的に実践していくことに重点を置く研修の趣旨に鑑み、以下の2点について取組が不足していることが、担当指導主事による振り返りから明らかになった。

a 子どもの姿を具体的に捉えて授業を組み立てる力

b 自己の課題を分析して継続的に課題解決する力

④次年度の研修に向けて

ア 子どもの姿を具体的に捉えて授業を組み立てる力の育成

1回目の講話では、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動それぞれのねらいを大切にしつつ、授業づくりという共通した視点を持ち、2年目として取り組むべき課題を明確にできるような内容を設定する。各班では、初任者研修の時から積み上げてきたものに加え、講話から得た授業づくりの視点や日々の実践での振り返りをもとに、具体的な子どもの姿をイメージして授業づくりを行う。また、授業研究に向けて、事前に学習指導案を授業者以外の研修者に送付し、自分の実践とリンクさせ、どのような視点で授業を見るかをあらかじめまとめてから授業研究に臨めるようにする。

イ 継続的に課題解決していく力の育成

第2回に持ち寄るレポートは、初任者研修で確認した班のテーマを踏まえて自分が取り組むべき課題を挙げ、どのように実践し、課題解決を図ったかをまとめるよう指示する。レポートについては、研修日前に担当指導主事、班員に配付し、協議のポイントについて事前に共有できるようにする。協議では、個々の課題に共通する視点を捉えて初任者研修での班のテーマを更新し、自分の授業に置き換えて考えられるように支援する。研修で得た授業づくりの視点や共有した更新後の共通課題をもとに、自己課題を設定し、継続的に課題解決を図る力を身に付けさせる。自分の授業を振り返って課題の原因を探り、具体的な手立てを設定して授業改善に臨めるようにする。継続的な取組とするために、校内の学年会や研修等で報告することや実践を記録することを促していくことも考えられる。

(3) 3年目教員研修

①研修の計画

受講後に期待される研修者の姿

教科の目標と内容の理解を深めるとともに、子どもの学習状況等から授業を振り返り、課題を一層明確にして授業改善を図ることにより、授業力を高めている。

①班別協議（教科指導）

- i) 2年目を終えて設定した課題をもとに、指導計画の工夫、教材の工夫、ねらいを実現させるための評価方法の工夫等を具体的に位置付けて実践した教科の指導案に「成果と課題」を加筆したものを持ち寄る。
- ii) 実践を報告し合い、授業実践から見えてきた課題をもとに班での課題を共有する。第3回の授業者、教科等を決定する。

②班別・中学校教科別協議（教科指導）

- i) 班で共有した課題を踏まえ、授業者の単元（題材）構想をもとにねらいを明確にした授業づくりについて話し合い、授業を見る視点を決める。
- ii) 各自の単元（題材）構想を見直し、日々の実践及び授業研究に向けて、具体的な手立てを位置付けて課題を更新する。
- iii) 更新した課題をもとに、課題意識を持って日々の授業実践及び授業研究に取り組む。

③班別・中学校教科別授業研究（教科指導）

- i) 班で共有した課題及び授業を見る視点を踏まえ、子どもの学習状況に着目して代表者の授業を参観する。
- ii) 各自の実践と授業を重ねて考え、単元（題材）目標の実現を目指した指導方法、教材、評価方法等の工夫の視点から課題解決を図ることができたのかについて協議をするとともに、3年目を終えるにあたって確認した諸課題について考える。
- iii) 次のステージに向けて、自分に必要な実践的指導力や専門職としての知識・技能について考え、教員としての成長に見通しをもって、日々の実践における課題を設定する。

②研修の実際

本年度より新設された研修であり、ステージ1のまとめとしての位置付けをもつ。教科学習の指導に焦点を当て、授業力を鍛えることに重点を置いた研修である。教科の目標と内容の理解を深めるとともに、子どもの学習状況等から自分の授業を振り返り、実践上の課題を一層明確にして日々の授業改善を図ることにより、授業力を高めることを目指す。

Stage1のねらい

教員としての土台となる資質能力を身に付ける

総合的な人間力を高める

授業力を高める

第1回

3年目教員研修のねらい等についてのガイダンスを受けた後、持ち寄った教科の学習指導案をもとに、これまでの実践の成果と課題について協議した。班で共有した課題をもとに各自の実践の方向性を確認し、授業者及び授業教科を決定した。

第2回

各自の単元（題材）構想について、班で共有した課題に関わる具体策に重点をおいて報告し合った。次に、「学習指導要領との関連、単元（題材）の目標、学習活動の展開や教材、指導と評価の一体化、新たな学び」を視点に、授業者の構想をもとに単元（題材）の目標を実現する授業づくりを目指して協議し、授業を見る視点を共通確認した。

第3回

班で共有した課題及び授業を見る視点を踏まえ、子どもの学習状況を授業記録で振り返りながら研究協議を行った。授業と自身の実践の成果と課題を重ねて考えることにより、自分の授業力について改めて考察し、ステージ2に向けた具体的な実践目標を設定した。

Stage2に向けて 学び続ける

③成果と課題

ア 成果

a 共通の課題をもって授業改善に取り組むことの効果

「授業力と向き合ってきた一年だった。見えてきた課題も多く、壁にぶつかるばかりの3年目だった。」

課題を共有したことにより、日頃の授業に取り組む視点が明確になった。また、初任者研修から班別協議を積み重ねてきたことの効果が表れている。第3回の授業研究では、実践上の課題と重ねて考え、授業の成果と課題を明確にした上で、より具体的な改善策を考える研究協議とすることができた。

b 授業の振り返りを授業改善に生かそうとする意識の高まり

「毎時間の授業をしっかりと振り返り、課題を見付け解決していくしかない。」

振り返りを授業改善の「サイクル」として認識し、それが実際に機能するものにしようと模索する姿が見られた。研修後のアンケートによれば、5月に比べ1月の「授業を振り返る」割合が増加している。また、振り返りの方法が具体的で効果的なものになる等、質的な変化が生じていることが推測される。

c 見通しをもって授業づくりを進めることの必要性への気付き

「何ごとも、俯瞰してものごとを見ること。単元を通して、学年を通して見ること。」

1時間の授業の質を高めるだけではなく、単元（題材）全体で力を育成するという見方をするようになってきた。自分の授業の課題を挙げる研修後のアンケートでは、小学校では「ねらいに即した学習活動」が増加し、中学校では「単元や題材にわたる見通しをもった指導計画」が最も多い。

イ 課題

教科の授業力を高めることに重点を置く研修の趣旨に鑑み、以下の2点については取組が不足していることが、担当指導主事による振り返りから明らかになった。

a 子どもの学習状況を捉える力 b 教科の目標と内容の理解

④次年度の研修に向けて

ア 子どもの学習の実現状況から自分の授業を振り返る力の育成

2年目教員研修終了時まで、「授業を振り返る具体的な方法」と「授業記録の取り方」について研修し、振り返りの方法のある程度身に付けておく必要がある。（研修ハンドブック P.8-9 と関連）

それを基盤に、第3回の授業研究では子どもの反応、行動等の具体的な学習状況の記録をもとに研究協議を進める。単元（題材）の目標、指導方法、教材、評価計画等を学習指導要領の目標や内容と照らし合わせ、子どもの学習の実現状況から見て妥当であったかを検証することにより、子どもの姿から学習状況を捉える力を養い、授業を振り返る力を質的に高めることをねらいとする。

イ 単元（題材）の学習指導計画を作成し実践する力の育成

教科としての授業実践の質を上げていくために、校内研修との関わりを強める。3回の資料提出に当たっては、「必ず管理職に目を通していただく」という指示を付け加えることとする。第1回の資料については、前年度に実施した研究授業レベルの学習指導案を想定しているため、加筆項目を「参観者の意見」「実践の成果と課題」「自分の授業力の分析」とする。第3回の資料については、取組の条件を付帯し「学習指導案を全教職員に配付する」「授業を公開する」こととする。

また、担当指導主事の関わりを一層強める。第1回、第2回の資料の事前送付を依頼し、あらかじめ担当者が研修者の取組の概要を把握しておくことにより、研修時の助言をより有効なものとする。第3回の学習指導案は10日前必着とし、当該教科の目標と内容に沿った助言に努めることとする。

なお、小学校班においては、研究教科を班内で統一することも有効であると考えられる。

2 ステージ2

(1) 2校目異動者研修

①研修の計画

受講後に期待される研修者の姿

初任校での実践を振り返り、さらに自己を高め、近い将来、学校の中核的な存在となれるよう成長していこうという意識をもっている。

- ①講話「服務規律」「人権尊重教育」 ガイダンス(レポートテーマ提示)
- ②班別レポート協議<「4月からの自分を振り返って」「現在の職場でどのような役割が求められているのか」>
 - i) 持ち寄ったレポートをもとに自分達に求められている役割を考え、2校目異動者としての課題を共有する。
 - ii) 自身が目指す教員像と現在の自分を重ね合わせ、これから取り組むべきことについて考える。
 - iii) 自分の課題を設定し、目標の実現に向けた方策を考え、実践の計画を立てる
- ③班別レポート協議<「実践レポートをもとに自己の取組の成果と課題を振り返る」>
 - i) 各々の成果と課題を共有し、自身の取組を振り返る。
 - ii) レポート協議を通して、職場における自分の役割や責任について考える。
 - iii) 専門職である教員及び中堅教員としての自己の課題を設定し今後継続して取り組むべき方策について計画を立てる。

②研修の実際

5年経験者研修と区ごとに開催していた2校目研修を統合して新設された研修である。ステージ2の入り口の研修として、自己の指導力を高めていくだけでなく、近い将来、校内の中核的な存在として成長し、組織の中で人と人をつないでいく役割を担っていこうとする意識を高めることを目指す。

Stage2のねらい … みんなをつなぎ、自ら専門性を高める

第1回 全体研修

「服務規律」「人権尊重教育」の講話と、ガイダンスを受けた。ガイダンスでは、研修のねらいと流れについて共通理解を図るとともに、この研修の基本となる考え方として、「これからの教員に求められる資質能力」についての説明を受けた。また、次回に向けたレポートの課題が示された。

第2回 各区会場

レポートをもとに、自分達が直面している課題や組織の一員として期待されている役割について共有し、自分達が身に付けるべき力を明らかにした。また、それを自分が目指す教員像と照らし合わせることで個人課題を設定し、その課題を解決するために取り組むべき方策を考え、実践計画を立てた。

各学校での実践期間 8月末～12月

第3回 各区会場

実践計画をもとに8月末～12月にかけて実践し、その成果と課題をレポートにまとめて持ち寄った。協議では、それぞれの実践から自己を振り返り、今後どのような教員を目指すのか、校内でどのような役割を果たすのかについても一度見つめ直した。なりたい自分の実現に向けて何ができるのか、自己の課題や身に付けたい力について考え、実践と振り返りを続けることを確認した。

10年経験者研修に向けて

「なりたい自分」の実現に向けた継続的な取組

③成果と課題

ア 成果

a 「初めての異動」という切実感を共有することの効果

「ひと通りのことができると思っていた自分が恥ずかしい…。毎日戸惑いの連続です。」

新しい職場での戸惑いや不安が研修に対する切実感に結び付き、互いの思いに共感し合いながら熱心に協議に取り組むことができた。自分を振り返り、校内での立ち位置を考え、課題や困難さを感じながらも、求められる役割や期待に応えるために自分の力を伸ばそうとする意欲の高まりが感じられた。

b 振り返りと共有から「なりたい自分像」の確立へ

「じっくりと考える時間がなかなか取れない現実があるが、考えることの重要性を改めて認識した。」

研修の流れにグループ協議と一人で考える時間を効果的に位置付けることで、自分自身と向き合い、「今後、どのような教員を目指したいのか」について深く考える姿や、互いの考えを共有する姿が見られた。「なりたい自分の実現に向けて」という共通の課題のもと、自分を高めるために必要なことをじっくりと考え、実践に向けて計画を立てることができた。

c 「自分自身」から「学校全体」への意識の高まり

「この研修でみんなと話し合ったことを学校へ帰ってから周りの先生方に伝えようと思う。」

3回の研修を終えた研修者からこのような感想が寄せられたことが、新設した2校目異動者研修の大きな成果といえる。「見通しをもつ」「実践する」「振り返る」という一連の研修の流れの中で、教員としての視野の広がりや組織の一員としての自身の成長に手応えを感じていることが分かる。この意識の高まりを今後の継続的な実践に結び付けることができれば、近い将来、学校の中で中核的な役割を果たすミドルリーダーとして成長していくことが期待できる。

イ 課題

ミドルリーダーとして成長していくための素地を培うという研修の趣旨に鑑み、研修の効果をより高めるために以下の2点について取組を強化していく必要があることが、担当指導主事の振り返りから明らかになった。

a なりたい自分に向けて、課題解決を継続していく力

b より高度な専門性を身に付けようとする探究力

④次年度の研修に向けて

ア 研修・実践の足跡を継続して記録する

研修の中で自らを振り返り、具体の成果や課題から一步踏み込んで考える姿は見られたが、そのことを日々の教育実践の中で繰り返し意識し、次の実践として取り組んでいくことが必要となる。この点について今年度は十分な検証をしていない。研修、実践の足跡を継続して記録に残すことを確実に実行していくことが、研修の充実の方策として考えられる。研修者に呼び掛けるだけでなく、研修記録ノートの作成等、具体的な方法を示すことで確実な取組を支援していく必要がある。

イ より高度な専門性に目を向け探究力を継続させる

初異動を機に、「校内での関係づくり」を大切にすることも重要であるが、「自分の力を高めること」に力を注ぐことは欠かせない。「自分で自分を磨く」「他者との関わりを通して磨く」この両面から専門性を高めようとする意識付けを大切にし、3回の研修を通して高まった研修者の意識を、それぞれの職場で継続させ、今後の実践に結び付けるための見通しを立てる研修場面を設定する。

(2) 10年経験者研修

①研修の計画 (全13コマ中テーマ①「特定の研究テーマに沿った課題研修」テーマ②「授業研究、教材研究を通じた研修」のみ抜粋)

受講後に期待される研修者の姿

学校の中核として教育活動を推進していく力を身に付けようとしている。

①研修ガイダンス

自己評価シートによる自己分析と振り返りをもとにした自己課題設定のための意見交換

②グループ協議1「特定の研究テーマに沿った課題研修の経過報告とグループ協議」

レポートを報告し合い、各自が抱える課題を共有して意見交換し、今後の実践についての解決方法を見つけ、具体的な方向性を探る。

③グループ協議2「授業研究に向けた指導案等の検討及びグループ協議」

レポートを報告し合い、各教科等の課題を共有して意見交換し、今後の授業の質を高めるために、実践することについて具体的な方向性を探る。

④グループ協議3「特定の研究テーマに沿った課題研修の成果及び課題の報告とグループ協議」

⑤グループ協議4「授業研究、教材研究等を通じた研修の成果及び課題の報告とグループ協議」

②研修の実際

10年経験者研修では、学校や子どもの実態を踏まえた課題への取組と授業改善に向けた授業研究の両面から「ミドルリーダーとしての資質能力を養っていくこと」を視点として研修を見直した。校内での実践と校外研修が有機的につながって効果を上げることができるよう、1年を通してグループ協議、実践、レポート作成等を位置付け、継続して取り組む構成とした。

第1回 研修の全体像を理解し、取組の視点を中心に課題設定の方法や研修計画について共通理解を図った。その後、グループに分かれテーマ設定のための自己分析を行った。

8月

テーマ1, 2を決定後、テーマに沿って、校内で実践。

テーマ1 (学校や子どもの実態を踏まえた課題への取組) について、各自レポートを持ち寄り、グループ協議を行った。各自が抱える課題を共有して意見交換し、今後の実践についての具体的な方向性を探ることができた。

テーマ2 (授業改善に向けた授業研究) について、各自レポートを持ち寄り、授業の質を高めるための具体的な取組についてグループ協議を行った。経験の浅い教員を対象にどのように授業公開し協議会を運営・実施するかについても併せて確認した。

テーマ1, 2共に、実践の継続的な取組。テーマ2については、研修の成果を校内での授業研究会を通して発信する。

1月

テーマ1・2について、それぞれ成果と課題をレポートにまとめ、持参した。報告から、課題を共有し、グループ協議では、課題解決に向けての具体的な方策、有効な指導法の情報交換、そこから見えてくる学校組織の中での役割などについて話し合いを深めた。

15年経験者研修に向けて

「ミドルリーダー」の役割を認識し、「つなげる」意識を具体的な取組にして校内に発信していく力を継続的に高めていく。

③成果と課題

ア 成果

a 学校や子どもの実態に応じた適切な課題設定

「自分が今まで苦手としていた部分を課題として研修した。研修を通して自分の課題が明確になった。」
「夏と冬の2回のグループ協議において、ミドルリーダーとしての学校運営や教科指導での『生徒の思考力を高める授業』について話し合えたことがよかった。」

研修後のアンケートによれば、テーマ1、2の両方について「学校や子どもの実態を踏まえて、適切に課題を設定することができた。」とする割合が90%を超えている。異動も経験し、教員経験10年というまとまった期間を経たところで、自己の姿を見つめて実践を振り返ったことが、多様な子どもたちの姿や学校体制について多面的に判断する力を養う契機になったと考えられる。

b 中堅教員に求められる役割の自覚の高まり

「中堅教員として学校の中核を担い若手をリードしていく立場にあることを自覚し、意識をもって職務に取り組もうと確認するよい機会であった。」

研修の序盤では、「ミドルリーダー」の役割を担っていくことへの戸惑いを表情に出す研修者も見られた。その後、自己の実践の振り返り、グループ協議、課題に沿った実践と記録（レポート）という流れで年間を通して取組を継続したことにより、自己の専門性を高めるとともに校内に取組を発信していくことの認識が深まっていった。特に、授業を公開して研究協議を運営することを校内研修として位置付けたことの趣旨が理解されていた学校では、経験の浅い教員への実践的な指導法の継承の機会となり、ミドルリーダーの役割を具体的にイメージすることに効果的であった。

イ 課題

ミドルリーダーとしての資質能力を養っていくという研修の趣旨に鑑み、研修の効果をより高めるために以下の2点について取組を強化していく必要があることが、研修者の研修後のアンケート及び担当指導主事の振り返りから明らかになった。

- a 実践の学校内への発信力 b 校外研修と校内研修を関連付ける力

④次年度の研修に向けて

ア 実践を学校内に発信するイメージの明確化

レポートやグループ協議の中では、学校を組織としてつなげていく役割を担っていかなければいけないという意識は高まっていた。しかし、研修後のアンケートでは、その意識に立って十分な発信ができるところまでには至っていないという研修者が約半数を占めている。学年や分掌等での発信や、授業公開における研究協議の運営方法などについては、映像による提示を加えることでイメージ化を促したり、授業後の研究協議の進め方について具体的に示したりして研修ガイダンスを充実させ、研修者の主体性を一層高めていくよう努める。

イ 校外研修と校内研修を関連付ける力の育成

勤務校外での研修で新たな視点や情報を得ることが校内研修としての日々の実践に継続して結び付いていかなければ、研修の成果が上がったとは言えない。研修後のアンケートでは、関連付けを考えたことができたかどうかについて、「ややできた」と回答した割合は67%であったが、「よくできた」とする割合は13%のみに留まった。

10年経験者研修には、異校種交流研修や希望研修等の校外研修も設定されている。これらが校内研修としての日々の実践を意識した内容となるよう、研修者自身の計画を促していく必要がある。

(3) 15年経験者研修

①研修の計画

受講後に期待される研修者の姿

ミドルリーダーとして、学校運営に積極的に参画する姿勢と課題解決能力を身に付けている。

①講話「服務規律」「メンタルヘルス」「人権尊重教育」

②講演1「カリキュラム・マネジメントとは」

グループ協議1

カリキュラム・マネジメントの視点から、総合的な学習の時間、キャリア教育等のモデルとなる全体計画について改善点を探り、カリキュラムマネジメントの手法を学ぶ。

③講演2「今、ミドルリーダーに求められるものとは？」

④グループ協議2

ミドルリーダーとして校内でどのように力を発揮していくか。～実践プラン作成～

*グループ協議で作成した各学校での実践プランの成果と課題を後日報告書にまとめて提出する。

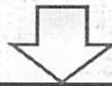
②研修の実際

ライフステージ研修のうち、ステージ2のまとめとしての性格をもつ本研修には、今後の教員生活を通して自ら専門性を高め、知識・技能の絶えざる刷新に探究力をもって取り組もうとする意識の高まりが求められる。加えて、同僚と協働しチームで対応する力の高まりも求められる。従前の講義中心からグループ協議を取り入れた内容に改め、研修者がこれまでの自分を振り返り、相互にミドルリーダーとしての意識を高め合えるように構成した。

第1・2回

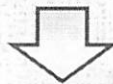
「服務規律」「メンタルヘルス」「人権尊重教育」についての講話をもとに、15年の経験を踏まえて、今再確認すべき事項について見識を高めた。

「カリキュラム・マネジメント」については、学校を組織的に活性化させる視点を得るため、講話を聞き、それをもとに、総合的な学習の時間、キャリア教育等の全体計画についてモデル案の改善点を探るグループワークを実施した。



第3・4回

第3回は、ミドルリーダーに求められる資質能力について、授業改善の視点、授業研究の進め方、組織マネジメント等をテーマに講話を聞き、第4回は、第1～3回の内容をもとにグループワークを行い、自校の教育活動の改善に向けた各自の実践プランの作成につなげた。



各自のプランに従って実践し、「実践報告レポート」を作成。



Stage3 「目指すミドルリーダー像」に向かって実践を継続

③成果と課題

ア 成果

a 豊富な経験に基づいたグループ協議の充実

「まず、授業で支持される、授業で信頼される、そんなミドルリーダーになりたい。」

15年経験者は、各学校において既に学校運営の中核としての役割を担っていることも多く、校務分掌の運営、学校行事等の企画提案、校内研究の推進役等として実践を積み重ねている。グループ協議は、それらの豊富な経験をもとに質の高まりが見られ、教員としての専門性の高まりを再確認する機会となった。更なる授業改善、特別な支援を必要とする子どもたちへの対応など、今自分に求められている資質能力の向上に向け、今後自ら高い理想を掲げて探究していく必要性を確認することができた。

b 調整力を発揮し学校の活性化を図る核となることへの自覚の高まり

「自分一人で何でもできる気になっていたが、一人では生徒を育てることはできないと感じている。

だからこそ、若手とベテランをうまくつなぎ、チームで生徒を育てていける教員集団になりたい。」

子どもたちの活動、経験の浅い教員の育成、地域（保護者）との連携を意識し、その中で自分の役割を見出した取組が実践報告に数多く見られた。年間行事予定の見直しを図る際、行事単独ではなく学校全体を俯瞰的に見て保護者や地域の協力も得る方向性を提案する等、これまでの教職生活の中で蓄積してきた多くの経験や知識・情報を再構成し、新たな活動を生み出そうという自覚の高まりが確認できた。

イ 課題

校内のミドルリーダーとしての役割を理解し、実践に結び付けることに重点を置いた研修の趣旨に鑑み、以下の2点については取組が不足していることが、担当指導主事による振り返りから明らかになった。

a 学校運営の参画につながる高次の省察力

b 新たな学びを進め喫緊の教育課題に対応する力

④次年度の研修に向けて

ア グループ協議を通じた学校運営の参画につながる省察力の育成

本研修におけるグループ協議は、学校組織に働きかける新たな発想を醸成するための触媒の役割を果たす。本年度は、学校運営に参画することのイメージづくりまではできたが、研修の開催時期が集中していたため、新たな視点に基づいて実践を進め、その成果や課題を深めるには至らなかった。次年度は、グループ協議を一定の期間を置いて複数回適切な位置に設定し、実践を踏まえた省察の質をさらに高める。このことにより、実践の報告に留まらず、目指す姿の実現への道筋が思い描ける終結とする。

イ 学校全体を俯瞰して組織に働きかける力の育成

各学校の要として組織に働きかける意欲と経験を基にした実践力はかなり高まっている。しかし、15年経験者には、これからの時代に求められる子どもたちの力を育成し、複雑で多様な教育課題に対応していくために、さらに、新たな視点、教育手法を得て、課題を更新していくことが求められる。そこで、自身の豊富な実践を理論と往還させて、より高度な教育実践力を身に付ける研修としていく必要がある。講話やグループワークの内容は、最新の教育動向に基づいたテーマとし、自校の全体計画や学校評価等をもとに実効性のある構成とする。

IV 研究のまとめ

1 成果

(1) ライフステージに応じた研修の全体像の明確化

ライフステージ研修の全体像を念頭に置き、学び続ける教員としての姿を支えるという役割を意識して研究を進めた。「研修ハンドブック」には研修の目的を明記して共通理解を図るとともに、期待される研修者の姿を具体的に設定した。このことにより、研修を受ける側と運営する側双方にとって研修全体における当該研修の位置付けが明確になり、研修の効果を高めることができた。

(2) つながりを意識した研修の充実

期待される研修者の姿が明確になる中で、「研修と実践のつながり」を意識した研修内容が設定されるようになった。各研修においては、ねらいに応じてそれぞれの研修者が自身の授業や役割から課題を設定し、継続的な取組に努め、その成果を交流する一連の課題解決の充実が図られた。また、研修の終了時には、当該研修のねらいに対して自身の取組を振り返るようにすることで、さらに、次の研修やステージに向けてどのように学び、成長していきたいかを見通すよう意識付けができた。

(3) 多角的な検証

研修担当者、研修者の両者の振り返りを生かし、研修の在り方を検証した。各研修担当指導主事が「有効であったこと」「改善を要すること」「具体的な改善策」の3点で研修を振り返り、分析を行った。また、研修後のアンケートを実施し、数量的に把握して分析することで、研修の成果と課題を多角的に捉えることができた。これらの資料は、研修者の経年変化を追う基礎資料として活用することも期待できる。

(4) 校内での発信を研修に位置付けることの効果

10年経験者研修を始めとするステージ2では、校内での発信を重要な課題として研修の在り方を模索し、研修内容と方法の改善を図った。研修後のアンケートでは、「自己の実践を校内で発信できた」という回答者と「ミドルリーダーの役割を具体的にイメージできた」という回答者に、相関関係が見られた。校内での発信を研修に位置付けることが研修の効果を高めることの裏付けと考えられる。

2 課題

ライフステージ研修の初年度として有機的なつながりの視点から改善に取り組み、所定の成果を上げることができた。課題は、研修充実のための手掛かりとして次年度の計画に生かしていきたい。

(1) 意識の高まりを実践の充実につなげる

研修を新しい学びの構築や学校組織の活性化につなげることの重要性については、各ステージ相応に認知されるようになり、研修者の振り返りには、それぞれに学び続ける教員として自身の目指す姿が記述されていた。研修者の学びや意識の高まりは学校での実践を重ねることで、より確かなものになると考える。校外研修の内容をもとに日々の実践の中で継続的に取り組み、成果を発信できるよう、様々な場面を捉えてライフステージ研修の趣旨や内容の周知に努めていきたい。

(2) 研修者の成果を次年度の研修の高まりにつなげる

本年度、学び続ける教員像の具体の姿として自身の実践への振り返りを重視し、授業の記録、校内での取組の成果と課題を記述して各自の課題の更新に役立てる手法を取り入れた。この過程で得られたグループワークの成果物や記録ノート等は、次年度以降の研修者が見通しをもって研修を進めていくための有効な資料となる。集積、整理し、本市教員のライフステージ研修全体の質的な向上に役立てることに努めていく。今後も様々な角度から研修の在り方を検証し、PDCAサイクルを稼働させ、研修者の意識の高まりによる研修への期待に応えられるよう、より一層の充実を図っていきたい。